

新地っ子の夏休み 2012 報告書

宮城県との県境にある沿岸の町、福島県新地町の子ども達 27 人が、夏休みの 4 日間を富士山の麓、山中湖畔で過ごしました。

子ども達にとってその 4 日間がどうであったのか、様々な角度からご報告します。



目次

1. 実施概要	02
2. 実施の経過	03
3. 「新地っ子の夏休み 2012」を終えて	04
4. 活動報告	06
① キャンプ日誌	
② キャンプリーダーの感想	
5. 評価 ～保護者へのアンケート結果～	28
6. さいごに	32
7. スタッフ紹介	33
8. ご協力いただいた機関、団体	34
9. 資料	35



1. 実施概要

- 【趣 旨】 東日本大震災で被災し、また、原子力発電所事故による放射能汚染の不安にさらされている福島県の子どもたちは物理的にも心理的にも我慢が強いられる生活を送っている。その子ども達が、夏休みの数日間、安心して過ごすことのできる環境でのびのびとした楽しい共同生活を過ごすことにより、心と体を癒し、希望をもって生きる力を取り戻すことへの一助とする。また、昨年に続き新地町にある3小学校の子ども達を対象とし、普段交流の少ない3小学校の子ども達がキャンプ生活によって「新地町の子ども」としての連帯感を共有し、新しいコミュニティを作る次世代育成につながることを期待する。
- 【実施期間】 2012年7月27日(金)～30日(月)
- 【実施場所】 公益財団法人東京YWCA 山中湖センター
- 【参加者】 福島県相馬郡新地町の小学生27名
運営に関わった大人19名
- 【主催】 公益財団法人東京YWCA 被災者支援プロジェクト
- 【企画実施】 公益財団法人東京YWCA 青少年育成事業部教育キャンプ課
- 【後 援】 新地町教育委員会
- 【協力団体】 NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会、上智大学コミュニティ心理学研究室、明治大学震災復興支援センター、日本YWCA

【プログラム内容】

	27日(金)	28日(土)	29日(日)	30日(月)
8:00		朝食	朝食	朝食
9:00	新地町出発	自由時間	自由時間	10:00出発
10:00	↓ 貸切バスで山中湖へ！	ゆったり自由遊び	ハイキング	↓ 貸切バスで新地町へ！
11:00		鬼ごっこ、湖畔で遊ぶ、サッカー他		
12:00		昼食	山の頂上で昼食	
13:00		湖で遊ぶ	ゆったり自由遊び(選択プログラム)	
14:00		①カヌー・ボート	プール、バドミントン、クラフト、湖畔で遊ぶ他	
15:00		②湖畔で遊ぶ[借り物競争]	自由時間	
16:00		シャワータイム	バーベキュー	
17:00	到着・リーダー紹介・サイト巡り	自由時間		
18:00	夕食	夕食	夕食	新地町到着
19:00	親睦会(アイスプレーキングゲーム)	ナイトウォーク	お風呂	
20:00	お風呂		キャンプファイヤー	
21:00	お休みなさい	お休みなさい	お休みなさい	



2. 実施の経過

2012年

- 4月 6日 (金) 新地っ子の夏休みプロジェクト
- 5月 9日 (水) 新地町教育委員会にて打ち合わせ
- 5月 11日 (金) 東京YMCA山中湖センター下見
- 5月下旬 子どもたちにチラシ配布
- 5月 19日 (土) 第1回リーダー会 (研修、趣旨・キャンプ場情報の共有)
- 6月 9日 (土) 第2回リーダー会
- 6月 22日 (金) 第3回リーダー会
- 7月 5日 (木) 第4回リーダー会
- 7月 11日 (水) 新地町役場にて参加者と保護者対象に準備会開催
- 7月 27日 (金) ~ 30日 (月) 「新地っ子の夏休み 2012」実施
- 8月 11日 (土) 参加者保護者にアンケート送付
- 10月 21日 (日) 新地町農村環境改善センターにて思い出会開催
- 12月 8日 (土) 第5回リーダー会



3. 「新地っ子の夏休み 2012」を終えて

～ 子どもの内部に「ある」が根づくことを願って～

寺出壽美子（NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会理事長・東邦大学薬学部講師）

昨年に引き続き、新地・福田・駒ヶ峰小学校の子どもたち 27 名と、今年は山梨県山中湖畔で夏休みの 4 日間を過ごしました。昨年の反省を踏まえて、さまざまな工夫や計画をリーダーたちと練りながらプログラムを考えて来ました。今夏のキャンプは、子どもたちにとってどんな体験や思い出を育んだでしょうか。

地震と津波と原発事故から 1 年半近くが経過した中で、子どもたちはどんな想いで日々を暮らして、このキャンプにどんな期待と不安を抱きながら参加しているのか、そして、子どもたちと一緒に過ごすリーダーはどのような心積もりで子どもたちと関わろうとしているのか、そのことが私にとっては一番気掛りなことでした。イギリスの児童精神科医 D・ウィニコットは、「ある」は「する」に先行しなければならないと言っています。親は子どもに対して、勉強させるとかお稽古を習わせるとか、「させる」という行為を先行させがちです。けれども、子どもからの愛して、抱っこして、受けとめてという欲求を乳幼児期より母親や養育に携わる方がその都度、しっかり受けとめてあげることで、子どもの内部に生きていく礎である「ある」（存在感覚）を根づかせることこそを、「させる」行為より優先させることが、子どもを安心・安定へと導くのだとウィニコットは言っているのです。

日々のせわしない生活の中で、ともすると大人は先行すべき「受けとめ」を後回しにしたり、子どもに「させる」ことばかりを強制しがちです。さらに、大震災の影響で環境が激変したり、親御さんの気持ちが不安定になっていたりしますと、子どもを受けとめる余裕すらなくなっているかもしれません。たとえ環境が変わっても、親や家族と一緒に生活できることや、日々のさりげない親の笑顔や、そっと肩に手を置いてくれたり、1 分間膝に抱き上げられたり、就眠前の数分間、添寝してくれることで、子どもの気持ちは十分癒されるものです。十分な甘えが許された子どもは、内部に「ある」（存在感覚）の基盤が根づいて、その結果、ひとりになることも、人に譲って待つことも、お手伝いを率先してするようにもなっていくものです。

山中湖畔での 4 日間は、リーダーの皆様はこの「受けとめ手」になっていただきたいとお話しました。長年、日本の学校教育を受けて来ている多くのリーダーは、知らず知らずのうちに先生が生徒に指示・注意を出すように、命令一下で集団行動をとらせることに馴れてしまっています。従ってリーダーには、子どもたちに対して命令・指示を出す「与える」存在としてではなく、自らを子どもたちに「さし出す」存在として関わってほしいとお願いしました。この 4 日間、子どもたちはリーダーにおんぶや抱っこを含めて甘えつくしていました。参加したくないプログラムには参加を強制もしませんでした。27 名の子どもたちが、「受けとめ手」との出会いによって生きていく礎をほんの僅かでも根づかせる一助になっているとしたら、望外の喜びです。



3. 「新地っ子の夏休み 2012」を終えて

～ 出会いという小さな幸せ ～

上智大学総合人間科学部心理学科
コミュニティ心理学研究室
久田 満

たった数日間のキャンプでも、企画・立案から実施、そして評価までを入れるとそれなりの作業量になります。昨年は、震災発生直後ということで、大急ぎで（大慌てで？）準備を進めました。それでも、大過なく終えることができ、子ども達も楽しんでくれたようでした。その点、今回が2度目となる「新地っ子の夏休み」は、十分な準備期間がありましたので、比較的スムーズに企画が進みました。昨年苦労した学生ボランティアの確保も、明治大学震災復興支援センターのご協力もあり、順調でした。

もう一つ、2度目であったことの良かった点は、「再会」です。「はじめまして」ではなく、「久しぶりだね」とあいさつできた子ども達がありました。体も心も成長していました。この企画の内容が何か、どんなことができるのか、どんな雰囲気なのかを一度体験している子達ですから、すぐに溶け込み、新しく参加してくれた子ども達の「模範」となってくれました。初めて参加した緊張気味のキャンプリーダー（学生ボランティア）達にとっては、むしろ自分達をリードしてくれる頼もしい存在だったのではないのでしょうか。企画側の我々にとっても、そのことはとてもありがたいことでした。あっという間に、明るく楽しい雰囲気が出来上がったのです。

今回の各プログラムは、キャンプリーダーが中心となって企画・実行してくれました。その何人かは経験者でしたが、今回が初めてという大学生にとっては少々きつかったかもしれません。それでも、彼ら・彼女らなりに工夫を凝らし、子ども達と一緒にはじけていました。子どもと大学生。どちらがどちらを遊ばせているのか。傍で見ていても分からない。そんな微笑ましい三泊四日でした。帰りのバスに乗り込む子ども達を見送るキャンプリーダー達の目に涙があふれていたのが印象的でした。

日本では、少子化が急激に進行しています。同時にインターネットが人々の日常生活を大きく変えています。子ども同士が広場で遊ぶ風景が見られなくなってきました。大学生が小学生と触れ合う機会がどんどん少なくなっています。そんな時代だからこそ、今回のような体験が、子どもと学生の双方にとって貴重なものとなるでしょう。

東日本大震災は、とてつもなく大きな不幸でした。しかし、それがきっかけとなって企画された今回の試みが、子ども達と大学生に小さな幸せをもたらしてくれたとしたら、「シニア」と呼ばれた我々にとってもこの上ない喜びです。

「はじめまして」と「久しぶりだね」が同時に聞こえてくる出会いの再現を、今から楽しみにしています。



4. 活動報告

① キャンプ日誌

齊藤 崇

【初 日】7月27日（金）

バスでは特に酔ってしまう子どもはいなかった。PA などでも集団行動ができていた。子どもたちからは「長い…遠い…」という発言が何度もあった。予定よりも30分遅れて山中湖に到着。バスの中はやや寒かった。昨年同様、子どもたちからキャンプ地に対しての放射能や津波を心配する発言(ex 水は飲めるのか、地震がおきたら山中湖は津波が起きるか)があった。しかし、そうした心配や発言をする子どもは、昨年と比べて少なかった(3、4人ほど)。

一人の男の子は、昨年と同様、地震や放射能に関する心配やそれらについての知識を発言することが多かった。各家庭によって、子どもたちに対する保護者の放射能や地震への対応や発言内容も違うと考えられる。バスが山中湖畔のキャンプ場に到着すると、先に到着していたリーダーたちが歓迎のプラカードを持って迎えてくれた。子どもたちがジュースで喉を潤してから、広場でリーダーたちの紹介を行った。

<1日目のリーダー会にて>

リーダー全員を集めて行った。各リーダーは子どもたちを寝付かせることに、あまり慣れていなかった様子。男の子の中には、12時過ぎまで起きている子どももいた。初日を振り返り、様子の心配な子どもがいたため、リーダーの配置などを変更。また、翌日のプログラム、明日朝にはおねしょの確認をすること、子どもたちへの関わり方について等の確認を行った。その他、バスの中での子どもたちの様子を各担当リーダーへ伝える。

【2日目】7月28日（土）

午前…男子は朝6時頃から起きる子どもが数名いて、散歩などを行った。朝食後は自然に自由遊びにした。自由遊びの際、子どもたちは各キャビンと広場で遊ぶ。各キャビンでは、カードゲーム、お絵かき、ツイスター。広場ではサッカー、キャッチボール、バトミントン、バレー、虫探し、湖遊び等、思い思いに遊んでいた。キャンプ期間を通して、男女が一緒に自由遊びをすることが少なく、女子は室内で遊ぶことが多かった。

午後…子どもたちの様子と暑さを考慮し、休憩を1時間半ほど取った。それから外遊び等を再開。すいか割りをし、湖でカヌー・ボート・借り物競争を行った。借り物競争では、男女が一緒に遊ぶことができていた。リーダーは子どもたちに対して、帽子や名札、水分補給の声かけを行った。

夜…入浴をナイトウォークの前に変更。途中、近くで花火大会が行われていた。その後、予定していた花火を行い、21時となってキャビンに戻った。この日、子どもたちはすぐに寝ていた。



4. 活動報告

① キャンプ日誌

<2日目のリーダー会にて>

- ・グループの中で手をつないだり、少しずつ関係ができてきていた。花火の際に、2人が喘息になった。
- ・高学年と低学年で、子どもたちのグループがくっきり分かれてしまう。
- ・お昼前に1人が発熱し、午後に通院。数名の子どもたちはリーダーにベッタリで離れない。些細なケガでも不安を訴え、フーちゃん(看護師)のもとへ。表情の少なかった6年生の男の子にも笑顔がみられるようになった。
- ・落ち着いてきて、子どもたち同士での会話も増えた。大人しい子どもたちも、室内遊びを通して仲良くなっていった。

【3日目】7月29日(日)

午前…自由遊び後、パノラマ台へハイキング。予定よりも早く着いたことや子どもたちの要望もあり、頂上まで登ることに変更。やや曇ってはいたが、天候は良かった。下山中、女子たちから「まだ帰りたくない」「来年も来たい」等の発言があった。様子の心配だった女の子は、リーダーに普段の生活の様子などを話す場面もみられた。ハイキングへは、Aグループの女子が2名、体調不良などで参加できず、おりがみ等をして過ごした。

午後…13時過ぎにキャンプ地に戻って来たことなどもあり、14:30まで休憩。それから時間を1時間に短縮して、選択プログラムを行った。昨日同様、室内ではお絵かき、葉っぱ等の自然を使って、画用紙にお絵かき、カードゲーム、ツイスター等を行った。外遊びでは湖遊び、バトミントン、キャッチボール、プール等を行った。前日のリーダー会では、プールの入り方について、男女別にするか一緒にするか等を検討したが、結局、プール遊びを希望したのは女子だけだった。バーベキューでは、くじ引きで作ったグループで調理や火担当等に分かれ、焼き上がったものから自由に子どもたちは食べていた。ケガをする子どももおらず、比較的、順調に行うことができた。

夜…入浴後、キャンプファイヤーを行った。途中で「猛獣狩り」などのゲームを行った。6年生が火をつけ、一人一人感想を話すのが、恥ずかしくて言えない子もいた。昨日に続き、1人が喘息になった。



4. 活動報告

① キャンプ日誌

<3日目のリーダー会にて>

- ・ 極端に写真を嫌がる子どもがいた。落ち着きの無かった子どもも様子が落ち着き、一人でどこかに行ってしまうことが無かった。前日まで乱暴だった子も、おんぶをせがむ等の様子がみられた。また女の子の中には、男の子たちと外遊びをする姿もみられた。
- ・ 風邪で休んでいた子どもが夕方から戻った。落ち着きの無かった子どももこの日はだいぶ落ち着いていて、指しゃぶりもほとんどなかった。リーダーたちに向けて、こっそりとお手紙を書いている子どもがいた。
- ・ 引き続き、室内遊びを楽しむ姿もみられた。遊んでいる途中に「帰りたくない」という発言も。また、初日からずっと「津波」「地震」「放射能」といった発言を繰り返す子どもがいた。子ども同士の意見の衝突やトラブルもみられた。
- ・ その他、ハイキングで予定を変更して頂上まで登ったこと、風邪から班に戻った子どもへのフォローについて、明日の出発までの流れなどを確認した。

【4日目】7月30日(月)

最初に、ベッドや荷物の整理、部屋の掃除を行った。その後、グループごとに集まってお話と写真撮影。10時を少し過ぎてバスで出発。全員での集合写真では女の子が写真を嫌がったりして、数名が入れなかった。バスに乗り込む際に、「自由に座りたい」という意見が子どもたちから出ていた。帰りは、行きよりも子どもたちも落ち着いており、寝てしまう子どもも何人もいた。お土産を買う時の子どもたちは本当に楽しそうだった。時間ぎりぎりまで、皆、買い物をしていた。

バスが福島県に入り、飯舘村を通った際に「気をつけろ!」と言って、口をふさいでいる子や、その子の発言で「え? 原発近いの?」と慌てる子どもがいた。一方で、全く気にしない子もいた。放射能や原発への感じ方、考え方など、子どもたちの間で個人差が大きかった。また、まだ仮設住宅に住んでいる子とそうでない子など、同じ地域内での復興の差異もみられた。新地には予定よりも1時間30分過ぎての到着だった。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【赤川友理恵】

私たちは4日間、新地町の子どもたちとともに時間を過ごすことになりましたが、最初は子どもたちと馴染めなかったらどうしよう、どう会話しようか等、不安なことがいくらかありました。

ですが、子どもと出会って一緒にグループ名を決めたり寝食をともにするうちにそんな些細な不安も吹き飛びました。それは子どもたちの元気さや底知れないパワーによるものだと思います。

とにかく夜遅くなっても朝早くても興奮からか元気に跳ね回る新地っ子を見ていて、さらにじゃれついているうちにいつの間にかこちらも元気をもらっていました。

最初は殴られ蹴られも手加減を知らなかった子もいつの間にかおんぶを多くねだってきたり、静かで冷静だった女の子も最終日には一緒にじゃれつくようになってたりして、何回も名前を呼んでくれる様子の変化がとてもうれしく、4日目にお別れするのがとても寂しくなりました。

ただ反省なのですが、子どもたちの前でどのくらい携帯を見ていいのかがちょっとはつきりしなくて個人的な問題で困ったことがありました。内定先の企業から重要な連絡があったのですが、それに気づく暇もなく、連絡が遅れてしまったということがありました。正直ここまで時間に余裕がないとは・・・という感じでした。あとせっかく用意してきたレクリエーションもいくつか実行できなかったものがあり、もっと時間をかけてやりたかったというのが本音です。自分の計画不足と子どもたちの体力を考えれば至極当然のことでしたが。次にもし同じような機会をいただいたときは、その点も踏まえて実行に移したいと考えています。

私たちにとってかけがえのない時間になりましたが、果たして子どもたちも同じように思ってくれたかが少し気がかりです。生涯かけて忘れられないような思い出になっていることを願っています。

本当に素敵な時間をありがとうございました。可愛い子どもたちに感謝です。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【石渡千晴】

一言でいうと、とても疲れたけれどとても濃い四日間でした。

とにかく本当に疲れました。一日中たくさん子どもたちとずっと一緒にいる機会はほとんどなかったので、イメージだけでキャンプに臨んだのですが、一番イメージと異なっていたのは子ども達の体力です。甘く見ていました。朝早くから夜遅くまで本当に元気で、それだけ楽しんでくれていることが嬉しくもあり、大変でもあり…。

もちろん疲れていただけではなく、参加して良かったと思える経験をたくさんすることが出来ました。特に、子どもたちの変化に触れられたことが、私にとっては一番印象的です。たった4日間でしたが、それでも子ども達が初日とは変わっていく様子を感じることが出来ました。一緒にいる時間が長くなるにつれ、新たな一面を見せてくれる子ども達や、自分の興味のあること、家族のこと、学校のことを話してくれる子ども達がいました。もっと一緒にいれば、もっと子どもたちの新しい面を見られたのかもしれないと思うと、4日間は短かったなと思います。ただ、私の体力的にはちょうど良かったです。

ただ、もっと子どもたちの話をたくさん聞いてあげられれば良かったなとも思います。たくさん子どもたちといっぺんに話していると、一人の子どもの話が途中で別の子どもの話で遮られてしまうことがままありました。一人の子どもと一対一で話せる時間をたくさんとるのは実際なかなか難しかったのですが、それでももっと上手く時間を使えたらなとも思いました。

そして、もっと子どもたちのことを事前に知っておくことが出来たらとも思いました。子どもたちと一緒に行動しているときに、どうしてこういう行動をとるのだろう、と考えさせられ悩ませられる場面がたくさんありました。そのときに子どもたちのこれまでの生活や経験を知っていると、もしかしたらこういう理由があるのではないかと少しは予想を立てることができ、その子どもの行動をしっかりと受け止めることが出来たのではないかと思います。もちろんそれは予想でしかありませんが、リーダー会で子どもについての情報を聞くと、「あの子の行動の理由はここにあるのかもしれない」と思うことが度々ありました。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

子どもと接する中でそれが出来れば一番良いとは思いますが、子どもと遊ぶことに追われてしまうので、事前に知ることが出来れば良いなと思いました。

ここからは本当に個人的な感想ですが、子どもたちを見ていると、本当にありのままなのだと思いました。上手く言えないのですが、子ども一人一人の人格が、行動にありのままに表現されているように感じました。今の私は我慢したり無理をしたり、時には嘘をついたりして生きています。もう私は子どもではないのでそれが当たり前だとは思いますが、子どものころの私は今と違って、私のあるがままに生きていたのだと思います。子どものころの自分の行動には、自分の原点があるのだろうと、子どもたちを見ていて思いました。

そして、子どもたちがありのままにぶつかってくるのと同じように、私が何気なく発した一言を、何気なくした行動を、子どもたちはありのままに受け入れるのだと思います。そう思うと、自分の言動一つ一つを大切にしなければと思いました。

キャンプリーダーやシニアのみなさんが全力で取り組んでくれたお陰で、それぞれのイベントを子どもたちは楽しんでいただいているように思います。途中予定を変更することもありましたが、大きなトラブルもなく（具合が悪くなってしまった子どもがいたことは残念でしたが）終わることが出来良かったです。子どもたちにとって、あの4日間は良い思い出になってほしいと思います。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【江原有紀】

プログラムの企画の段階であまりきちんと予定をたてなかったため現地で慌ただしくなることもありましたが、状況に合わせて臨機応変に予定を変更・短縮することもできたので、あまり詰め過ぎずに行ったのは良かったのではないかと思います。

私自身、子どもの頃キャンプに参加しリーダーがリードしてくれ、家族と離れた空間で成長できたという記憶があったので、今回初めてリーダーの立場になり子ども達のがのびのびと遊べる空間を提供したいという気持ちで臨みました。

1日目は子ども達もまだ慣れていないのか落ち着きがなく、お互いぎこちない部分もありましたが、やはり遊びを通して少しずつ心を開いてくれる子も出てきました。また、同じ学校の子と一緒にいて、他の学校の子とはあまり話さない子がいたため懸念していましたが、その不安は2日目には全くなくなるほどグループの中での壁はなくなっていました。子ども達の元気が有り余っていて特に男の子はなかなか寝付かず、同じ部屋の男性リーダーはなかなか眠れなかった人もいたと思います。就寝時間を過ぎてもキャビンから出てきてしまう子も見受けられたので、他の団体のことも考えると就寝・起床時間についてはもう少し厳しく言っても良かったのではないかと思います。

2日目は前日の夜ミーティングで決まったようにOちゃんを担当し、急にどこかに行かないか気をつけて見ていましたが、1日目に比べて落ち着いていました。1日目は慣れない空間で気持ちが高ぶっていたのではないかと思います。片付けになると外に出てしまいましたが、ご飯の時間もグループの子と同じように少し会話に参加しながらご飯を食べていました。女の子は比較的集団で動くことが多く、自由時間には部屋の中で絵を描いたりトランプをし、外に出て遊ぼうと提案するとみんなで外に出ました。ナイトウォークや花火など決まったプログラムと自由時間の比重が丁度良かったと思います。しかし、注意していたとは思いますが花火の煙により喘息の症状が出てしまった子がいたため、そうした子に対する対策をプログラムを考える段階からもう少し考えておくべきだったのではないかと思います。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

3日目はハイキングの際に女の子2人が途中で断念し、みんなとは別に昼食を取りましたがその際、落ち着きがないとされていたOちゃんが年上の子を気遣っていたことに驚き、大人な一面を見る事ができたのでとても嬉しい出来事でした。また、この時に限ったことではありませんが震災のことを話してくれる子どもが多く、震災や放射能に対する不安を抱えていると同時に、1年以上経ち震災を受けとめようと心の整理をしているのではないかと感じました。子ども達の心のケアはまだまだ必要だということを改めて認識させられました。

4日間を通して個人差はありますが子ども達の成長ぶりに驚かされる場面が多々あり、キャンプを通して親御さんも知り得なかった子ども達に一回り成長して帰ったのではないかと思います。子どもとの接し方に不安を持って参加しましたが、こちらが特別何かしてあげなくてもそれぞれが自主性を持っており、それを尊重してあげれば良いのだと思います。来年参加することはできませんが、もう一度参加したいと思うくらい充実した4日間を過ごすことができました。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【海老沢麻理】

今回は、新地っこのキャンプに参加させていただきありがとうございました。キャンプが始まってからも「これから4日もやっていけるのか…」と、正直不安ばかりでした。無事にキャンプを終えることが出来て本当に良かったです。

業務的な事から述べると、当日の反省会でも出ましたが、グループ分けは「生活班」と「行動班」に分けた方が良かったかと思います。やはり、遊びの時にまで男女で別れてしまい、交流のハバが狭くなってしまったことは、せっかくのキャンプだったのもったいなかったかな、と感じます。あと、もし可能であれば、グループリーダーも事前の下見に参加出来たら良いかなとも感じました。どんなに会議室でプログラムを話し合っても正直な所、全然イメージがわからず、結局ほぼぶっつけ本番な感じでいつまでも不安だったので…。

福島の子も達は、関東の子達と比べ、元気で体力があるのはもちろんのこと、素直で感情を表に出すのが上手だなと感じました。もちろんそれ故に、こどもの言動にこちらが傷つく事も多々ありましたが（笑）、それでも、これが本来のこどもと言うものなんだろうな、としみじみ思いました。そんな子ども達に囲まれていたからか、私も普段の生活では考えられないほど笑顔も涙もたくさん表に出していた気がします。飾らない事の大切さを子ども達から教えてもらいました。

家に帰ってからはしばらくは物足りない毎日が続いていましたが、今は自分の生活を取り戻し、現実に戻って居ます。きっと子ども達もそうなのでしょうね。子ども達が大人になった時に、「そう言えば行ったなあ…」と、一瞬でも思い出してくれる、そんなキャンプになっていれば嬉しく思います。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【大谷部 真希】

このキャンプの4日間は、本当に濃い時間となりました。キャンプが終わってしまった今、子ども達に会えないのが寂しくてなりません。それは、初めて出会い、たった4日間しか一緒に居なかったとは思えないほどの関係なように感じるからです。子ども達も同じように感じていてくれたらと切に願います。

キャンプ中は、一瞬一瞬が全力でした。自然を舞台に子ども達と向き合うことが、容易でないと痛感しました。それと同時に、元気に走り回る姿を見ると、パワーを爆発させるのに最適な場だと思いました。常に気にかけていないと傷つけてしまうということも学びました。表情が曇っていると気付くのでは遅いと思いました。「自分だけを見てほしい」という欲求が、みんなそれぞれ強く、グループのリーダーが2人というのは最低人数なのではないかと思うほどでした。水遊びやキャンプファイヤーなど、係でリーダーがグループから抜けてしまう時は、1人で見るが大変でした。特に、私のグループはぜんそく持ちの子がいたからかもしれません。グループとしての団結があれば、もっと違っていたのではないかと思います。その団結を作ることが出来ず、自分の力量不足に苦しみました。自分がしたいことを伸び伸びとすることと、ある程度は集団行動を意識してもらうこととの境目が難しかったです。

改善した方がいいのではないかと考えたことを述べさせてください。キャンプ場に子ども達が着いて迎えた時に、全体に向けたリーダーの自己紹介があれば良かったのではないかと思います。「あの人は同じキャンプのリーダーなの？」という言葉から、男子は女子のリーダーに、女子は男子のリーダーに対する認識が薄かったと思いました。また、子ども達の間、男女関係の複雑さがあったので難しいところですが、「みんなで」というよりは、「グループごとに」という姿勢がかなり強かったように思いました。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

また、グループ内で、1人だけ外で遊びたいということがありました。今回のキャンプはたまたま女子は2グループしかなく、部屋も隣で、別のグループに同じ小学校の友達がいたため、そちらのグループに混ざって遊ぶことが出来ました。

しかし、このような条件が揃っていなければ、他のグループともある程度仲良くないと厳しかったと思います。

最後になりましたが、このキャンプに参加させて頂けたことに感謝申し上げます。

果たして自分は子ども達を受け止められたのか、不安に思います。しかし、素晴らしいリーダーの方々の良い刺激をたくさん頂き、一緒につくり上げることが出来て幸せです。子ども達とのお別れの時の涙は、寂しさと達成感が入り混じっていました。

こんなにも濃い時間を、本当にありがとうございました。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【蕪木 翼】

性格柄か、振り返ってみると反省ばかりが思いつく。多くの場面で感じたことは、計画性が足りなかったということだ。十分な準備や話し合いができないままにキャンプ当日を迎えてしまったため、リーダー同士の情報共有や自分の担当以外のプログラムで何をするのが曖昧だった。

やはり本番の直前に一度リーダー会を開くべきだった。全員出席が困難なのは仕方ないが、各プログラムの担当から最低1名は来られる日くらいならセッティング出来たと思う。最後のリーダー会となった7月5日の時点では、まだどの班もプランができていなかった。担当外のプログラムの内容も知っていれば、久田先生が指摘されていたように、リーダー自身が楽しんで参加することで、より打ち解けやすい雰囲気を作り、もっと子どもたちを積極的に促すことも出来た。

つまり担当以外のリーダーの協力体制をもっととるべきだった。特に盲点なのは、担当リーダーは会場の準備や必要なものを揃えるのに忙しく、全体的な運営で手一杯になってしまうので、細かい配慮や個別に子どもの相手をしている余裕がないということ。プログラムを中心となって進めるのはもちろん担当リーダーだが、それ以外のリーダーも担当外はお任せではなく、フォローしていくべきだった。

こういった情報の共有は、キャンプ中にも逐一リーダー同士で確認していけるかとも思っていたが、予想以上に難しかった。というのも、プログラム中はもちろん、合間の時間も、何かしらは子どもと関わっていて、なかなかリーダーと打ち合わせをする時間がとれない。それに自分に多少の時間があっても、目当てのリーダーがどこにいるかがすぐにわからず、会えないことも多かった。

こういったことを防ぐために、やはりプランが固まった直前の段階で報告し合い、なるべく全員が全体像を把握しているとやり易いだろう。それは事後のミーティングにも生きてくるはずだ。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

自分の担当だった2日目夜に目を向けても、ナイトウォークでは急なコース変更があり、実際にナイトウォークの時間になっても準備は綱渡りのような状態で、開始直前まで松岡さんが必死にコース変更の段取りをつけ、人員を配置している間に、私が子どもたちの前で不確定なまま説明を始めていたくらいだ。

花火でも幸か不幸か山中湖の花火大会と重なり、收拾のつかない事態になってしまい、担当として申し訳なく思っている。

そういった至らない点多々あったが、一番の目的はプログラムを円滑に進めることではなく、子どもたちが楽しんで、思い出深い体験をしてもらうことだと思えば、子どもたちが笑っている姿をたくさん見ることが出来たので、少しは貢献できたかと思う。

子どもとの接し方はどうするのがよかったのか、そして最初に寺出さんに言われたような「受け止める役」になれたかは正直今でもわからない。ただ、こう言うと怒られてしまうかもしれないが、キャンプ中はその役になるうとは意識していなかった。というか、子どもと会う直前までは考えていたのだが、いざ始めるとその場その場に必死で、ただ全力でぶつかっていただけだったように思う。結局は私も子どもと同じで、初めての場所に行き、初めて会う人と接する不安の中で段々と慣れていって、何より一緒に楽しんでいた。

今回のキャンプは、最初から最後まで「待たなし」だったという感想がしっくりくる。先発して現地に入っ
ていきなり右往左往しながら準備して何とか子どもたちを迎えたところから始まり、次々とやってくるプログラムに奮闘した。それ以外の時間も子どもたちと話して、走って、おんぶして、食事、風呂と隙間なく格闘し、最後にミーティングをしてすぐ就寝。それを繰り返し、最後は子どもとの別れの余韻に浸る間もなくバスに飛び乗った。

そんな止まることなく流れ続けた4日間だったように思う。貴重な経験をありがとうございました。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【姜 安里】

『子どもたちとわたし』

彼らと接していると、時々胸が痛くなった。照れながらも興味津々で話しかけてくる福島なまりの彼らを愛おしく感じれば、そんな彼らが発する言葉が自分の中で思った以上に反復し、私にぶつかって来た。少し怖かった。

胸が痛かったのはもちろん、普段は子どもゆえの素直さと自由な身体感覚に溢れている彼らから（爆発的でさえあったほど、遊んでいる時のあのエネルギーはさすが小学生だなと思った。）、たまに母や父、震災の影がやはり「思っていた以上に」垣間見えたからだ。しかもそれはふとした時に、「何もなかったかの様に」子どもたちから軽く放出される。それがなお更に辛かった。

でもそれだけじゃ無い。本当のところは、無意識にその「思っていた以上」のレベルを勝手に予想していた自分に頼りなさを感じた事と、はたして子どもたちに十分対応してあげられているのかという何ともすっきりしない無力感のせいだったのではないか－自分の心の中で彼らの言葉が痛かった。

たった3泊4日のキャンプで子どもたちを「受け止めてあげる」なんて出来るとは思はなかったけど、彼らが発した言葉や行動に対して彼らが求めている形で反応してあげたかった。そこにはいつも自分の中の「母親像」だったり、弱い自分が存在していて、それらを通してはここぞとばかりに挑戦してきた。キャンプが終わってもそんな気が止まなかった。

キャンプの間、時間が経つと、子どもたちは更にわがままになり、レベルアップした悪がきになり、甘えて打ち解けて来れば来るほどそれは明らかになった。未だに私は反応することに難しさを感じている。鏡を見ているようだったし、結局のところ、どうすればいいかわからない。

「僕、お父さんいるみたいに見える?」「OOね、ずっと同じシャツ着て学校行ったことあるよ。」「私なんてこんな自分の姿（水着）を見て醜いなと思うんだから」



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【姜 安里】

言葉に出てくるものだったり、時には何も言わない事で放出されたり、逃げたり投げたり隠れたりなどの行動や、身体で示されたり、頭をなでた時の目だったり、子どもたちから出てくるものは様々だった。社会に飼いなされた大人の世界とは違い、一人ひとりが一致しない思ったままの表現が刺激的だった。

痛みを伴いながら表現される彼らの放出を前にどう反応しようか戸惑っていた自分も、子どもたちの素直で無邪気な存在によって自分自身が少しだけ開放されたのも事実だった。一緒に遊んでいると彼らの明るさと発想力の豊かさに胸がわくわくした。

サッカーをしたのも、湖で思いっきり遊んだのも（泥、水などを集団から思いっきりかけられ追い掛け回される）とても、楽しかった。あれから彼らはどう過ごしているだろうか。子どもたちにまた会いたい。

『キャンプと子どもたち』

キャンプ中、様々な事が頭に浮かんだ。キャンプの趣旨は、「子どもたちがのびのびと過ごす事、新地町の子どもたちの新しいコミュニティづくりにつなげること」。

やはり、自由奔放で素直な子どもたちといえども、だんだん日本の社会のなかできれいに「前習え」が組み込まれてきているのではないかと不安になった。それはミーティングの中でも何度か話題になった「男女わけ」の仕組みの事でもあるし、集団行動でリーダー（大人）が管理する仕組みでもある。子どもたちに用意されたプログラムを「選択させる」と、見事きれいに男女別々に行動するのも、もう当然の自然のなりゆきであるかのように感じたのは、はたして普段の学校生活とそんなに変わっていたのかどうか見えていて個人的に残念に思った。

もしまた機会があるならば、（変化に順応できるヤングで元気な子どもたちに）実験としてこんなキャンプはどうだろうかー



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

まず、リーダー（できれば男1、女1）と子どもたちを男女混合で全体で6名ほどのグループを構成する。そしてキャンプの間、食事の時、朝、夜を共に一緒に生活する（その中で男女別に分かれてしまうのは自由）。できれば食事でも毎回各自グループによる自炊を行い、就寝時も大人、子どもが混ざり同じ部屋で過ごす。初日にそのグループが自由に意見を出し合い自分たちでそのグループでの4日間の生活のスケジュールを作る（寝る、起きる時間、ごはんを作るとき、遊びについて、部屋のルールなどなど）。

積極的に集団行動（儀式的な集会やオリエンテーリングなどの全体での遊び）の数を減らし、個別のグループが自由に決めた内容が中心となってキャンプが展開する。昼間の内容は、大人がプログラムなどを最初から一切準備しない。現地にあるもの、その場の状況によく順応し、その場で出た案に対応できるようにする。遊びの内容は関与しない。

遊べる場所と時間だけを提供する。子どもたちは昼間の時間はグループ行動でもよければ、遊びたい人と行きたい場所へ行き、移動もできる。「こういうことやろうよ！」と子どもたちが自由に遊びを発明し、すべてにおいて彼らがやりたいことを決めるしくみ。

それにリーダーが参加する程度。ただ子どもたちがひとりにならないようにリーダーはいつも配慮する。子どもたち主導の個別グループが生活の中心となる「ミニ・ファミリー」生活の様な雰囲気の中で、子供たちがほかの子たちと勝手に生み出した「遊び」を通して色んな仲間やリーダー達、自然と触れ合える環境でのキャンプがあればいいなあ…(^o^)



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【齋藤 恭平】

全体の感想を言うと、予想していたよりもずっと楽しかったです。

初参加で僕自身キャンプの経験がない中で、いろいろと計画していくのは難しかったのも確かですが、毎回会議に参加するたびに新鮮な気分を味わっていたのを覚えています。しかし、十分な準備ができてなかったのもまた事実で。一番の原因は実際に行くところのイメージができてなかったということだと思います。担当で集まって話していても、「実際行ったことないからどうイメージしていいのかわからないよね」というセリフが何度も出てきたり。こんな感じで大丈夫なの？と、当日実際どうなの？という不安が常にありました。

でも行って見て、そんなにガチガチに決める必要はないなというのを感じました。まあ、なんとかなってるなみたいな(笑)。

実際プログラムの進行に支障のない程度で予想外のことがたくさんあったし、使うと思っていたものも使わなかったりとかあったので、大枠だけ決めてあとは臨機応変にやっていけばいいんじゃないかと。多少グダグダでも子どもたちが面白くしてくれた場面は何度もありました(笑)。でもリーダーたちの不安を取り除くために、来年以降開催する場合は、経験者が初めて参加するリーダーたちにどれだけ具体的なイメージを抱かせられるかが重要だと思います。なので現場の写真はたくさんあったほうがいいと思います。

その方が当日もとうまく対応できるんじゃないかなと。で、僕は当日は、初日は精神的に疲れて、二日目は身体的に疲れて、3日目からはランナーズハイみたいになって疲れを感じなくなりました(笑)。

楽しさが上回ったのか、子どもたちに元気をもらったのかはわかりませんが(笑)、でも、リーダー会は眠かったです(笑)。そんな子どもたちの印象は、本当に「生意気だったけどカワイイやつ」に尽きると思います。数々の無礼、罵倒、悪戯も、別れたあとではチャラにしてやってもいいかなってという感じで。自分に対して慣れてくれるのか心配だったけど、子どもたちからきてくれたし、自分の担当の班じゃない子もけっこうきてくれて、自分としてはすごくありがたかったです。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

最終日なんかは、別れるのが寂しいのか、子どもたちもより生意気になってかまって欲しいアピールをしてるのがかわいく思えました。

4日間だけだったけど、僕も別れたあとはやっぱり寂しさを一番感じました。なんだかんだで慕ってくれるところは純粹だなあと思いました。自分たちの企画したプログラムで楽しんでくれてる姿を見てるとやっぱり嬉しくなった。でもスイカ割りで割れなかった子がいたり、順番の都合でビッグカヌー乗れない子もいて(僕も乗れてません)、そこは反省点かなと。

でもそういった子たちも他の遊びで楽しんでいたし、僕らも楽しめたので成功じゃないかと思います。体調を崩してしまった子たちがいたのは少しかわいそうでしたけど。来年も来たいとか帰りたくないって言うてる子も何人もいて、けっこうグッと来るものがありました。でも別れの余韻に浸る時間がなかったので、帰りのバスはもうちょっと余裕を持たせて欲しかったです(笑)。

あと、新地に遊びに来てよと言ってくれた子もいたので、いつか必ず、行こうと思います。本当にこのキャンプに参加して良かったと思います。リーダー同士でも新しい出会いがあって、子どもたちにも出会って、一期一会というか、いい出会いができて、この縁を大事にしたいなと思いました。

最初はリーダー同士でもあまり馴染んでなくてぎこちない感じだったけど、当日になってみればあだ名で呼ぶことにも抵抗なくなって、自然と話せるようになって、まあまだちょっとよそよそしい感じの人もいますけど、まあ割と打ち解けてよかったです。何年後かに成長した子どもたちに会ってみるのも面白いだろうなと思いました。また、こういう機会があったら参加したいなと思いました。

ありがとうございました！



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【齊藤 崇】

『昨年と比べて』

子どもたちは全体に落ち着いていた。グループでケンカになる子どももおらず、泣いたり叫びまわる子どももおらず、(体調不良などを除いて)プログラムに参加できない子どももほとんどいなかった。震災に関する発言もだいぶ少なくなっていた。理由としては、震災後、時間が経って落ち着きが戻ってきたこと、昨年参加した子どもたちがいたこと、キャンプ日数が1日短かったこと、男女の建物が違ったこと(建物が同じなら、もう少し男女の交流があったかも)、大人の側の事前準備ができていたこと、大人しい男の子が多かったこと…などが考えられる。新地小の子どもたちの参加が多かった。そのため、男女ともに、普段の学校での人間関係がそのままキャンプでもみられたように思う。

『個人的な反省』

子ども一人一人のアレルギーや体調管理にもっと気を配りたい。キャンプ地にいる他の団体への配慮をもっと行いたい。プログラムを組む際には、下調べや準備を十分に行いたい。花火大会や登山など、突発的な出来事や変更にも、どう対応したほうがいいのか。水遊びの際には、子どもの体調も含め、もう少し細かく様子を見たり、ルールをきちんと守らせる。体調を崩した子どもがグループに戻る時のフォロー。各リーダーに対して、あまり出過ぎた関わり方をしない。アドバイスをする時も慎重に。各リーダーの疲れ具合や特徴、人間関係をよく観察する。各リーダーと子どもたちの関係性も考えて、自分自身の発言や立ち位置をわきまえ、配慮する。一方で、シニアに対してもリーダーに対しても、もう少し、僕自身の意見を伝えても良かったかもしれない。

『気がついたこと』

これは、なめ(*チーフリーダー)本人に聞いてみないとわかりませんが…なめもシニアの方に荷物をおいて、シニアのキャビンで寝た方が楽だった? かもしれません。僕もそうですが、たぶん、なめも自分の立ち位置? というか、他のリーダーさんたちとの関係性がちょっと難しかったかもしれません。今回は、プログラムを各リーダーが担当していましたが、リーダーさんによっては、ちょっと負担だったかもしれません。特に、グループに心配な子どもがいるリーダーさんや、重要なプログラムを担当したリーダーさん。もう少し、各リーダーのプログラムの負担が減ると、各リーダーさんの精神的な部分での疲れ具合が違のかな…と感じました。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【高橋 和加奈】

まずは本当に楽しかったです。参加して良かったと心から思いました。

福島の子どもたちに何かできないかと思い参加しましたが、子どもたちはみんな元気いっぱい、こちらがとても元気をもらいました。

リーダーの活動としては、キャンプ中の夜のリーダー会が一番印象的でした。時間をかけて1人1人の子どもについて考えて話し合っている時間がとても有意義に感じました。キャンプ前のリーダー会がゆっくり進行している感じがしたのに対し、キャンプ中は密度の濃いリーダー会でした。あのような話し合いがキャンプ前にもできたら良かったと思いました。

内容については、きちんと計画を立てて臨むことが大切だと感じたと同時に、その計画どおりには行かないことも実感しました。

被災地・被災者ということ意識しすぎなかった点は良かったと思いました。子どもたちの、被災者という面だけを見るのは間違っていると気付きました。一方で、実際に触れ合ってみると、小さな身体と心で彼らなりに震災を受けとめてきたのが感じられました。そんな子どもたちに少しでも力になれるよう、どう接するべきか、事前に話し合えたら良かったとも思いました。

子どもたちにとって東京のお兄さんお姉さんという存在は貴重だと思います。なのでキャンプ後の再会は意味のある集まりだと思いますし、私個人もとても楽しみにしています。

私たちリーダーにとっても大変良い4日間でした。ありがとうございました。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

【松岡 秀世】

今回のキャンプへの参加は、私にとって貴重な経験となった。自分にも被災地の子ども達に何かできることがあるのではないかと漠然な気持ちでキャンプへの参加を決めたものの、キャンプが近くなるにつれて、自分になにが何ができるのか、不安な気持ちも大きくなった。しかし、キャンプが始まるととにかく子どもに向き合うことに無我夢中で、本当にあっという間の3泊4日だった。

私はキャンプに参加する上で、一人一人との関わりを大切にしたいと考えていた。東日本大震災があり、1年が経った今、子ども達はそれぞれ様々な思いを抱えているはずである。子ども達一人一人に寄り添い、抱えている思いを受け止めたい、そのような気持ちでキャンプに参加した。

キャンプ中は毎日を全力で過ごした。しかし、キャンプが終わり振り返ってみると、自分は子ども達に寄り添っていたのか、もっとできることがあったのではないかと思う自分がある。子ども達の声に出していない気持ちをもっと理解することができたのではないかと思う。

自分自身、今目の前にあることをこなすことに精一杯になってしまい、周りを十分に見れていないことが多々あった。子どもの気持ちを理解してあげられていなかったこともあったと思う。

これはリーダー1人で出来ることではなく、リーダー同士の連携が不可欠だった。しかし、その連携がうまくいかなかった部分は反省点だと思う。リーダー同士がもっと声を掛け合い、協力しあって子ども達に寄り添うことができたのではないかと思う。

私自身、自分が手一杯のときもっと周りのリーダーに助けを求めるべきだった。リーダー同士の連携がしっかり出来ていれば、それぞれのリーダーにももっと余裕ができたのではないだろうか。



4. 活動報告

② キャンプリーダーの感想

反省点もあるが、それ以上に楽しかったことや嬉しかったこともたくさんある。たった3泊4日という短い期間であったが、子ども達は驚く程変わっていった。担当の女子グループの子ども達は、初めはなかなか自分の気持ちを出せなかった。これからどう変わっていくのか楽しみでもあり、少し不安もあった。

2日目になると、皆少しずつ自分の気持ちを口にするようになり、最終日には初日とは別人なのではないかと思う程変わった。子どもが自分の気持ちを正直に出せるようになったことが私はとても嬉しかったし、子どもが気持ちを出せるような関わりができたことは本当に良かったと思う。

しかし、リーダーの関わり以上に、子ども達同士の関わりの影響がとても大きかったのではないと思う。キャンプの中で、仲間を心配し思いやる場面をたくさん目にした。初めはリーダー抜きでは会話もできなかった子ども達が、子ども達だけで過ごすことが多くなり、いつの間にか「リーダーは邪魔者！」と言われる程にまでなった。きっと、同じ震災を経験したという点でもそれぞれ思うことがあったと思う。

これから先子ども達が生きていく中で、このキャンプで出会った仲間やリーダーのこと、キャンプでの思い出が少しでも生きる力になったらこれ以上幸せなことはない。私自身、新地町の子ども達と出会い、全力で過ごしたこのキャンプは、自分と向き合う良い機会になった。子ども達の笑顔や思い出は、これからの私の生きる力になると思う。



5. 評価 ～ 保護者へのアンケート結果～

【参加者概要】

性別	人数
男子	18
女子	9
計	27

学校名	人数
新地小	14
福田小	9
駒ヶ嶺小	4
計	27

学年	人数
2年生	2
3年生	4
4年生	5
5年生	10
6年生	6
計	27

【アンケート概要】

アンケート回答者：参加者 27 名に配送、19 名分回収（回収率 70%）

回答者	人数
父	3
母	15
その他	1
計	19

性別	人数
男子	14
女子	5
計	19

学校名	人数
新地小	9
福田小	8
駒ヶ嶺小	2
計	19

学年	人数
2年生	2
3年生	3
4年生	4
5年生	7
6年生	3
計	19

Q1. 今年のキャンプの日数（3泊4日）
についてはどう思われますか？

キャンプの日数	人数
適切	12
短すぎる	6
長すぎる	0
未記入	1
計	19

Q2. 開催時期についてはどう思われますか？

開催時期	人数
8月上旬	9
8月中旬	1
8月下旬	0
7月中	1
いつでも	7
未記入	1
計	19

Q3. キャンプ中の食事は全体として
いかがでしたか？

食事	人数
おいしかった	15
普通	4
おいしくなかった	0
計	19

Q4. キャンプリーダー（若いお兄さんや
お姉さん）の対応はどうでしたか？

リーダーの対応	人数
とても良かった	11
良かった	7
普通	1
あまり良くなかった	0
計	19



5. 評価 ～ 保護者へのアンケート結果～

Q5. 今回のキャンプにお子様を参加させようと思った理由は、次のどれですか？

参加理由(複数回答)	人数
のびのびさせてあげたい	13
自然の中で過ごさせてあげたい	13
気分転換させてあげたい	10
他の学校の子と親しくなって欲しい	7
たくましくなって欲しい	5
協調性を身につけて欲しい	14
ストレス発散させてあげたい	4
規則正しい生活を送らせたい	3
その他	0

Q6. 次の中で楽しかったものはどれですか？当てはまるものすべてに○をつけて下さい。

楽しかったこと(複数回答)	人数
バスの中	6
キャンプ場の散歩	7
体育館での人間ビンゴゲーム	5
広場での自由遊び	10
部屋の中での自由遊び	9
すいか割り	3
カヌー・ボート	15
湖畔での借り物競争・自由遊び	10
ナイトハイク(夜の散歩・肝試し)	13
登山	7
プール	4
野外料理での火起こし	5
野外料理での調理	6
キャンプファイヤー	11
食事のおしゃべり	7
子ども部屋でのおしゃべり	10
お食事当番	3
お風呂の時間	9
花火	2

Q7. もし来年の夏、小学生や中学生を対象とした今回のようなキャンプがあったらまたお子様を参加させようと思いますか？

来年度の参加	人数
ぜひ参加させたい	18
できれば参加させたい	1
その時にならないと分からない	0
参加させたくない	0
計	19

Q11. キャンプ後の様子はいかがですか？

キャンプ後の様子	人数
特に心配ない	18
少し心配なことがある	0
未記入	1
計	19



5. 評価 ～ 保護者へのアンケート結果～

◆自由記述回答◆

Q. キャンプリーダーに伝えたいこと。

- とても楽しくすごせました。ありがとうございました。
- 楽しく過ごせた様で家で沢山話しをしてくれました。又機会がありましたら参加させたいです。
- 来年も来てね！ぼくも参加したい！
- おとうさんおかあさんみたいでさみしくなかったです。またあいたいです。
- また会えたらまた会ってキャンプに行きたい。
- 子供達の面倒をよく見て頂きありがとうございました。キャンプから帰ってきてから、リーダーの話やら様子を一生懸命説明してくれました。
- わたりんキャンプでやさしくしてくれてたからです。
- 子供が、キャンプリーダーの方達に遊んでもらった事を聞きました。お世話になりました。
- リーダーがキョンとつばさで良かったです。ありがとうございました。

Q. 今回お子様をキャンプに参加させてよかったことは何ですか？

- 元気に帰ってきて楽しかったと言ったこと。
- 子供がとても良い笑顔で帰って来た事。思い出話がつきず、楽しかったようで良かった。
- なんだか少し大人になった様な気がしました。
- 大人になってかえてきた様に感じます。お手伝い等にも参加してくれる様になり本当に良い経験だったと思っています。
- 夏休みのよい思い出になりました。ちょっと大人になったようです。
- 不自由なキャンプ生活、電気がない、テレビのない生活が出来て良かったです。
- 集団生活のルールが身についた。
- 家族で出来ない事が出来、友達が多く出来た事。
- いつもは家族のだれかと一緒じゃないと行動できませんでしたが、帰ってきてからは責任感も出て、自分の事は自分で出来る様になりました。
- 楽しくすごすことが出来たこと、富士山が見れたこと
- 今回、一人での参加で心配したのですが、去年より少し成長したと思いました。
- 協調性や積極性など成長したなと思いました。親から離れての生活も、たまにはいいのかもしれない。
- 団体行動や野外活動、知らないお友達と仲良くするなど、すばらしい体験が出来て良かったです。
- キャンプを通して他校の友達が増えた。
- なんでもチャレンジしてほしくて参加させました。男の子なのでチャレンジ心をもってくれた事が良かった。
- キャンプに参加して、積極的に自分からいろいろな事にチャレンジした事を聞いて、とてもよかったと思います。



5. 評価 ～ 保護者へのアンケート結果～

◆自由記述回答◆

Q. 今回お子様をキャンプに参加させるにあたって、困ったことや心配だったことは何ですか？

- 親元を離れた事がなかったので心配でした。
- 長いバス移動が少し心配でしたがバスの中でも楽しく過ごせたようでした。
- 学校での宿泊研修では、“今無事会津につきました”等、親の携帯に学校からメールが届いていたので、安心でしたが、今回の山中湖はかなり遠いのと、バスの事故等が最近ニュースでやってたりしたので、無事着いたのかな？まだ着かないのかな・・・と少し心配でした。
- 小遣いの面で金額が決められてなかったので、どの位もたせた方が良いのかわかりませんでした。
- 自分の荷物整理（脱いだ服など）
- 他の小学校の子どもとどのように関わっていたか。
- 着いた時間や帰る時間の連絡が何も無い。現地からの連絡が全くないので心配だった。提案として一斉送信メールなどで状況を伝えたりしたら良いと思う。
- 本人がトイレを心配していましたが、「大丈夫」だったと帰ってきました。学校で“大”をしている子がいるとからかう子がいるので気にしていた様です。
- 特に心配はしてなかった。親友も多くさそい参加してくれたこと。
- 集団行動が出来るのか心配だった。
- 人見知りが多いので自分から積極的になれるか心配でしたが、友達ができて帰ってきました。大変貴重な体験でした。
- バスに乗っている時間が長いので、車酔いが心配でした。

Q. 今回のキャンプ主催者（東京YWCA）に対して伝えておきたいことは何ですか？

- 無事に帰らせていただきありがとうございました。
- とても良い企画でした。またいっしょに遊んでください。
- 来年もあれば、ぜひ弟と2人で今度は参加させたいと思っています。今回は楽しい思い出をつくって頂き、本当にありがとうございました！！
- ぜひとも続けて欲しいと思います。
- ありがとうございました。又このようなキャンプをしてほしいです。
- 去年今年と企画して頂きありがとうございます。新地から離れる事で地震を忘れるそうです（笑）。私達親にとっては大変ありがたいと心から感謝しています。
- 昨年も参加させてもらい安心して参加させて頂きました。ありがとうございました。
- 来年もまたやっていただきたいと思います。
- 大変感謝しています。子供達もよろこんで帰ってきました。
- こんな素晴らしい体験を子供達に与えて頂き、ありがとうございました。とても精神面など成長したと実感しています。感謝です。ありがとうございました。
- 大変お世話様でした。ありがとうございました。
- 大変お世話になりました。ありがとうございました。



6. さいごに

外山真理 (東京 YWCA 青少年育成事業部統括)

「新地っ子の夏休み」を終えてからの数週間、そばに子ども達がいるような感覚が続いた。それほど、子ども達ひとりひとりの個性やエネルギーは強烈だった。パワフルな子ども達に癒える私たちはヘトヘトになりながらも、瞬間瞬間に見せてくれる子どもらしいナイーブな感受性に心が揺さぶられた。子ども達のためのキャンプだったが、私たち大人にとっても忘れ難い体験となった。

あの3月11日、20メートル近い津波は町の観光スポットであった沿岸を破壊し、500世帯の土台だけが残った。子ども達にとっても大好きな場所だったことだろう。阪神淡路大震災で被災した子ども達が数年後に、かつての衝撃的な体験を思い出し、心が乱れる様子が見られたという報告を読み、子ども達を継続的に見守ろうと、2度目の「新地っ子の夏休み」を実施した。キャンプでは子どもたちに寄り添う青年リーダーの存在が何より重要だが、今回は全日程参加できる多くの青年達の協力を得ることが出来た。偶然にも、東京YWCAから目と鼻の先にある明治大学が新地町と復興協定を結んだことから、学内の復興支援センターが学生達に呼びかけて下さり、6人が申し出てくれた。また、昨年に引き続き上智大学で臨床心理を学ぶ学生たち、養育困難家庭をサポートしている青年たち、YWCAのキャンプリーダーなど、早々に14名の青年達たちがそろった。子ども達が27名であれば、14名の青年達でゆっくり子ども達と接することが出来るだろうと考えていた。

しかし、実際には青年たちは一時も休む間はない状態となった。特に初日から二日目にかけては、捕まえてくれるのを期待して走り回る子、ひとりでふらりとどこかに行ってしまう子、全力でぶつかってくる子など、日頃心の中に抱え込んでいる思いを放出するかのようになり、子ども達はてんでバラバラのような状態だった。青年達は、とにかく子ども達の心の「受け止め手」になるべく、追いかけて、探し、遊び、とことん子ども達の気持ちを受け止めていた。青年達がかけがえのない我が子を受け止めるお父さんやお母さんのような表情になっていき、子ども達は安心できたのだろう、日を追う毎に変化していった。元気なままでありながらも落ち着き、子ども同士の関わりが見えるようになった。夜ごとのリーダー会では、ひとりひとりの子ども達の様子を報告し合ったが、青年リーダーからは「・・・のように見えるかもしれませんが、あの子は・・・なのです」と正に親心と言うべき言葉が出てくる。わずか4日間の短いキャンプでどれほど深い関わりが生まれているのだろう。子ども達は、そんな青年達との共同生活をこれから先、ふっと思い出すことがあるのではないだろうか。被災し生活が元に戻っていない子や身近な人が津波で亡くなっている子、それらの体験を子ども達は詳細に記憶していた。また、様々な事情を抱えている子もいるかもしれない。子どもたちが言葉にならない思いを抱え込んだ時、安心できる環境で楽しく愉快地過ごした記憶は子どもたちの支えになっていくことだろう。

責任者としての反省は多々あるが、今回関わって下さった多くの方々のご協力により、実施できたことに心から感謝したい。そして、子ども達が健やかに成長できることを祈りつつ、これからも共にありたいと思う。



7. スタッフ紹介

責任者

寺出壽美子 (NPO法人日本こどもソーシャルワーク協会理事長)
久田 満 (上智大学教授、医学博士/臨床心理士)
外山 真理 (公益財団法人東京YWCA青少年育成事業統括責任者)

チーフリーダー

斉藤 崇 (NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会)
吉田 夏子 (国際基督教大学4年、東京YWCAキャンプリーダー)

キャンプリーダー

青木 計憲 (上智大学3年)
赤川友理恵 (明治大学4年)
石渡 千晴 (明治大学4年)
伊藤 慎吾 (上智大学大学院)
江原 有紀 (明治大学4年)
海老沢麻理 (NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会)
大谷部真希 (明治大学4年)
蕪木 翼 (明治大学4年)
姜 安里 (NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会)
齋藤 恭平 (明治大学4年)
高橋和加奈 (上智大学3年)
松岡 秀世 (NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会)

看護師

佐藤 房江

カメラマン

白井 裕介



8. ご協力いただいた機関、団体

～ 感謝を込めて ～

- 新地町教育委員会
- NPO 法人日本子どもソーシャルワーク協会
- 上智大学コミュニティ心理学研究室
- 明治大学震災復興支援センター
- 日本 YWCA





9. 資料

案内チラシ



公益財団法人東京 YWCA

新地っ子の夏休み2012



富士山が見える山中湖に行くよ！
思いっきり楽しい夏休みを過ごそう！
みんなに会えるのを楽しみにしてるよ！

期間● 7月 27 日(金)～30 日(月) 3泊4日
 場所●東京YMCA山中湖センター(山梨県南都留郡山中湖平野 419)
 対象●福島県新地町の小学3～6年生 30名(定員を超えた場合は抽選となります)
 参加費●5,000円
 お申込●参加申込書に記入の上、6月8日(金)までに在籍している小学校にご提出ください。

【往復に使う交通機関】貸切バス
 所要時間約7.5時間。途中、サービスエリアでトイレ休憩とお昼休憩を適宜入れます

準備会を開きます！

申し込まれたお子さんと保護者の皆さまを対象に行います。
 往復の旅、キャンプ場、プログラム内容、持ち物、スタッフ体制、
 安全管理などについてご説明します。
 日時：7月11日(水) 18:00～19:00
 場所：新地町役場1階会議室 101

後援：新地町教育委員会
 協力：上智大学コミュニティ心理学研究室、NPO法人日本子どもソーシャルワーク協会
 明治大学震災復興支援センター、日本YWCA、名古屋YWCA

主催 公益財団法人東京YWCA被災者支援プロジェクト

企画実施 青少年育成事業部教育キャンプ課
 101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-8-11

Tel.03-3293-5466 Email:petau@tokyo.ywca.or.jp ホームページ <http://www.tokyo.ywca.or.jp/>



9. 資料

アンケート

東京YWCA「新地っ子の夏休み2012」アンケート

記入上のお願い

- ・アンケートは、お子様一人につき一部ご回答下さい。
 - ・ご回答は、できるだけお父様かお母様をお願い致します。
 - ・ただし、Q1、Q3、Q4、Q5、Q6 に関してはお子様の意見をお尋ね下さい。
 - ・回答ずみのアンケートは、8月31日までにご返信用の封筒に入れて投函下さい。
- お忙しいところ誠に恐縮ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。

Q1. 今年のキャンプの日数（3泊4日）についてはどう思われますか？

1. 適切 2. 短すぎる 3. 長すぎる

Q2. 開催時期についてはどう思われますか？

1. 8月上旬が良い 2. 8月中旬が良い 3. 8月下旬が良い
4. 夏休み中ならいつでも良い

Q3. キャンプ中の食事は全体としていかがでしたか？

1. おいしかった 2. ふつう 3. おいしくなかった

Q4. キャンプリーダー（若いお兄さんやお姉さん）の対応はどうでしたか？

1. とても良かった 2. 良かった 3. ふつう 4. あまり良くなかった

* キャンプリーダーに対して伝えたいことがありましたら、ご自由にお書きください。

2012.8



PHOTOS



ENJOY





公益財団法人東京 YWCA

101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-8-11

Tel.03-3293-5421(代表)

Fax.03-3293-5570

HP : <http://www.tokyo.ywca.or.jp/>